

わがコミュニケーション学の青春

田村紀雄

1. R. パークとの出会い

わたしの40年を越える研究者生活の灯台になったのは、社会学者R. Parkである。パークは、1904年、40歳というかなり高年になってはじめて発表した論文『群集と公衆』（原文はドイツ語、1972年英訳がシカゴ大学から出版）の序文で、自身の青春期の生活から書き起こしている¹⁾。かれは、1887年、ミシガン大学でJ. デューイのもとで哲学の学士号を得たあと12年間の記者生活にはいる。記者といってもミネアポリス、デトロイト、シカゴ等の中西部の都市で発行されている週刊コミュニテイ新聞のレポーターで、記事になった行数で原稿料が支払われるフリーランスのライターであった。しかし、このライター時代、アカデミズムにない見聞がパークののちの学問の足腰の強さになっている。

「フリーライター」生活の後、ハーバード大学に進み、ここでW. ジェームス等に哲学を学び、さらにドイツでG. ジンメルやW. ヴインデルバントの薫陶をうけて帰国した。しかし、すぐには大学に職をうることは、できなかった。短期間のハーバード大学での助手生活は、かれに失望を与え、レポーター時代に血肉となった貧困、人種差別、家庭崩壊、非行、麻薬、ギャングといった「現実の人間社会」に飛び込む決意をするに至る。

パークは、「人種差別の州」として知られる南部アラバマ州のタスキーギに黒人運動の指導者B. ワシントンが建設した「黒人教育のコミュニオン」である「タスキーギ産業学校」にほとんど唯一の白人教師として加わる。黒人に技能・技術等をおしえる3000エーカーのキャンパスは、1600人の黒人学生を擁する当時の黒人の最高学府であった。

ここでの、10年間の生活のなかで、パークはさらに全米の都市、人種、移民、文化の問題への洞察を深めることができた。かれの生涯の転機になったのは、タスキーギで黒人問題のフォーラムを初めて組織したことだ。世界中から3700人ももの研究者が参集し、W. トーマスを基調講演者に招いた。パークより1歳年長のトーマスは、すでにシカゴ大学社会学部の重鎮、大学が研究課題にしようとしていた人種、貧困、スラム等の新しい課題に直面していた。ハイドパークという瀟洒な名前のシカゴ大学周辺のコミュニテイの名前とは裏腹に、この町は、大学創設時の高級住宅地から黒人のスラム、貧困と犯罪の温床と化していた。

パークはシカゴ大学が求めているカテゴリーの研究者だったのだ。シカゴ大学に招かれて、

はじめて講義をする非常勤講師に仕事をえることになった。1914年パーク50歳のときである。1年間にわずか3ヶ月間の時間講師であったが、初めて大学の教壇にたち社会学を講じることになった。最初のシラバスはいうまでもなく「アメリカの黒人」というテーマのために割いた。アメリカでアフリカ系アメリカ人を本気で研究する最初の社会学者になった。またChicago大学自身、その後多数の黒人社会学者を世に送った。それから退職するまでの、10数年間、驚くほどのエネルギーでヤマのような研究業績を上げただけでなく、多くの弟子を育て、Chicago大学を「シカゴ学派」(シカゴ・スクール)として打ち立て、また米社会学会会長として活躍した。その仕事のひとつに日本であまり知られていない「1924年、日本人・日系人調査」²⁾の巨大なプロジェクトがある。

このパークが組織したアメリカでののはじめてのマイノリティ研究はその資料とともに長い間埋もれていたが、シカゴ学派の周辺で1990年代、偶然の機会にわたしはこの鉱脈を掘り当てた。その一部は発表したが³⁾、定年後の仕事のひとつである。シカゴ学派の柱の一つは、「人間生態学」「都市メディア研究」である。人間生態学は、有限な資源としての都市空間で、人間、制度、文化、メディアはどう生きるのかであった。わたしの移民研究の土壌である。移民研究は、風景を絵の具でデッサンするような軽い気持ちで取り組むものでないことを、パークから学んだ。自らが、その移民たちの怒り、悲しみ、苦しみに身を置き、共有しないでは本物でないことも。それは、またまぎれなくシカゴ学派のテーマでもあった社会運動の一翼でもある。

2. 理科進学志望から「物書き」へ

わたしは、高校卒業直後、進学を断念した。理由は、1 理科系の大学には「赤緑色弱者」に受験資格がないことが、進学適性検査の点数をクリアしたあと判明したこと、そして2 家庭の事情、3 社会的関心等である。1953年→1966年、奇しくもパークと同様、12年間の間、「編集プロダクション」等でライターの仕事につく。ある小さな研究所、「国民文化会誌」、特信もの通信社など仕事を求めて渡りあるいた。記事1本、写真1枚、編集整理1点いくらの「フリーランス」の仕事で、数百本の原稿を多くは無署名、筆名で書いた。生活のための文筆活動だが風俗以外のジャンルはたいい手がけた。東北の寒村からはじめて「集団就職」で上京する中学卒の少年・少女をその自宅から追いかけて、夜行の臨時列車に同乗して上野駅に早朝到着した様子を記事と写真でまとめたり、和歌山県下の熊野山中で、狸掘り(すべて人力での掘削、運搬、選炭作業)の小石炭鉱山の10数家族の長期の争議等のルポルタージュを執筆したことは現在も脳裏に焼きついている。その頃から、ルポルタージュのために旅をすることに身体が慣らされていた。研究者にとり旅の魅力は、アンドレ・コデルスキーのアメリカ映画「Road Scholar」(1993)で描ききっている。

「フリランライター」というフレックスな仕事を利用して、大学と大学院の門を敲いた。いずれも今でいう社会人学生、社会人院生である。学部では、服部之総、小牧近江という社会学者を慕っての上京、わたしは後に『種蒔く人』というリトルマガジンを秋田県下で出していた小牧について一文を書いた⁴⁾。関学では、蔵内数太の影響をうけた。文化社会学の泰斗である蔵内は、従来のコミュニケーション研究に「人間流動の意義」を持ち込んだ。シンボル等の「伝達形式」の担い手としての「流動集団」として傀儡子、能楽師、河原者、行商人の役割を掘り起こした。H. シュライバー流に言えば、人びとは盗賊、娼婦と情報を共有したのだ。マクルーハンを振れば「人間はメッセージである」。

20歳後半に思想の科学研究会との誼をもつことになる。同郷の先輩、大野力を介してである。大野もいわゆる「物書き」として知られ、思想の科学に関係していた。この会を通じ、仲村祥一、小関三平、池井望、津金沢聡廣、井上俊、井上宏、らと小さな研究グループが生まれ長い期間共同の学問的思考スタイルを身につける訓練の場所になった。またこれらのメンバーで「民衆研究」で知られる「権田保之助研究会」が生まれた。かれらは、いずれもまだ大学の助手、非常勤講師、会社員であった。やがてこのグループにより『権田保之助著作集』全4巻が生まれた⁵⁾。

わたしは、権田の「コミュニケーション調査」について長文の解説論文を寄せた。また雑誌『思想の科学』に「ローカル新聞の生態」を執筆、いわゆる「ミニコミ」ブームの先駆けとなる。この掲載に骨をおられたのは山本明で、山本から得たものも多い。この論文の理論的な裏つけとなったのは、M. ジャノウイツの *The Community Press, in an urban setting the social elements of urbanism* である。ここからジャノウイツを輩出したシカゴ大学の社会学者たちへの関心が強まっていった。

「フリーランス」の「物書き」だが、仕事の関係で一時、関西に居住し、山本を介して城戸又一、和田洋一、鶴見俊輔ら同志社のコミュニケーション研究者と知り合い、研究会に顔をだすようになり次第にアカデミズムの世界に足をいれてゆくことになった。

3. 東京大学新聞研究所時代

東京大学へ助手として採用されたことは、このシカゴ学派をさらに研究するのに最高の環境であった。すでに30歳になっていたが、同僚の助手諸君も家庭をもち、比較的高齢で、東大出身者以外の人もいた。所属した講座は、教授日高六郎、助教授香内三郎、そして助手が私だった。シカゴ学派の魅力は、これまで日本の社会科学の主流が、豊かな社会を実現するために生産を拡大すること、賃金を引き上げること等に偏重してきた思想への批判を含んでいた。日本の社会科学もひとつだけの思想では、勿論なかったが、対立点といえば、生産手段を誰が所有するのか、生産されたパイをどう配分するかにあっただけで、生産のための

わがコミュニケーション学の青春

限られた資源、環境、廃棄物についての思いはなかったことだ。

この時期に初めて単独の著書として『日本のローカル新聞』を書き下ろし、約10版を重ねた⁶⁾。シカゴ学派の業績研究を通じ、それまで、身に着けた社会科学の方法を重ねあわせることになった。

思想の科学研究会は、鶴見俊輔が主宰しているわけだが、鶴見は同志社大学の新聞学専攻の教員として着任しており、私が東大の助手として東京へ移転するまで、その周囲の研究者、城戸又一、山本明、大淵和夫、橋本峰雄らとの交流をすることができた。これらの人たちから受けたものも多い。

思想の科学は、日本の敗戦から間もない1946年5月、鶴見和子、俊輔姉弟、丸山真男、都留重人、武谷三男、武田清子、渡邊慧の7人によって創刊された。ハーバード大学で日米開戦に遭遇し、戦時交換船で帰国していた鶴見俊輔は、戦争でそれまで閉ざされていた欧米の新しい学問を日本に精力的に紹介はじめた。

「コミュニケーション」の用語法、概念、研究法が、はじめて、日本にこの雑誌をつうじて紹介された。井口一郎（いのくち・いちろう）は、1947年に「コミュニケーション序説」を執筆した。この論文は、H. ラスウエル の名著『*Propaganda Technique in the World War, 1927*』を手がかりにコミュニケーション学に道をしめした。戦後、日本では、多数の学徒がラスウエルを紐解くが、井口はすでに、米軍資料に接しラスウエルに通じていたと思える。井口（いのくち）は、明治34年生まれ、東大政治学科を卒業後、新聞記者等を経て、旧満州につくられた建国大学教授であったが、敗戦で帰国していた。すでに、1939年に『フリードリヒ大王の新聞政策』を著し、1949年に『コミュニケーションの科学』を上梓した隠れたコミュニケーション学者であった。思想の科学研究会はこのような野にあった研究者をもきちんと掘り起こしていた。

井口は「公共的な伝達」と訳した Public Communication のなかに、放送のプログラム、定期刊行物、標章、儀式、建築物など、今日われわれがメディアと総称するすべてのもの列挙した。これは、戦前からの「新聞学」と言い習わしてきた学問に、「コミュニケーション学」という新しい広く深いベクトルを提供するものであった。さらに、日本の学者にありがちな海外の論文を紹介するたんなる「輸入業者」の枠を超えようとした。1948年3月、『思想の科学』に執筆した論文「新聞学への新しい構想」では、「広義の新聞学」を拓くものとして、研究対象を新聞のほかラジオ、映画、演劇などメディア全般を照射する提案をしている。

日本のコミュニケーション関係の代表的な学会である「日本マス・コミュニケーション学会」が、それ以前の名前である「日本新聞学会」の名称変更の根拠とした「新聞」の範疇をめぐる議論に、その30数年前にすでに問題を提起していたのであった。

4. 思想の科学研究会の脈絡に生きて

この民間の小さな研究会は、1946年から1960年ころまでの凡そ14年間、海外の新しい思想や理論を日本に持ち込む「輸入業者」として独自の役割を果し続けた。その中には、コミュニケーション学のほか、デューイ、カルナップ、モリス、S. I. ハヤカワら意味論、記号論、プラグマチズムの主題等もふくまれている。その後、「輸入業者」から次第に「輸出業者」に転換してゆく過程は、日本の「文化・情報の生産力」が高まったというよりも、アメリカの対日政策が「民主化」から「冷戦の砦」へと変化してゆく背景があったと考える。

その転機を示すのが、英文「思想の科学」(*The Science of Thought*) Iを発行した1954年9月号である。これには、その後の日本を代表する思想史の研究者鶴見俊輔はじめ、石本新、上山春平、中村元らが寄稿した。以降、読者論、伝記、地域社会、会議、大衆芸術、ジャーナリズムといった主題に移行する。「輸出業者」としてのカルチュラル・スタディといわれる領域はほぼカバーされ、生産されていったと見てよい。この路線は、1960年の「安保問題」以降、確かなものになる。1960年の運動以降、鶴見は米国の政治を批判する言説が増え、米国へ一度も渡航していない。

日本の初期のコミュニケーション学者である南博、日高六郎、波多野完治、今村太平、加藤秀俊、掛川とみ子、荒瀬豊、片桐ユズル等は、この時期までに雑誌『思想の科学』に登場している。思想の科学はコミュニケーション学を紹介、日本への移転を促しただけでなく、一定の集団の研究者を育てる役割ももった。その流れのなかに、わたしも確かにいた。この雑誌にわたしはかならずしも多くの論文を発表していないが、思想の科学を取り巻く脈絡に生き、研究プロジェクトに参加し、その集団のなかで多くの仕事をし、論文を書き、議論に参画してきた。

思想の科学研究会の延長の自主的研究会である『共同研究 日本占領』では、竹前栄一などと、『日本ユートピア学事始』では、渡邊一衛らと、『共同研究 集団』では、大沢真一郎らと、共同執筆した⁷⁾。小著『日本のリトルマガジン』⁸⁾では、思想の科学等に連載した文章を収録した。これら大部分の仕事は、わが30歳代前半までにおこなった作業である。わがコミュニケーション学の青春時代であった。

(この文章は、2005年1月22日 大学院生等を対象におこなった「最終講義」のレジюмеに加筆したものである。)

注

1) Park, R. *The Crowd and the Public*, 1972. 序文

わがコミュニケーション学の青春

- 2) 田村紀雄「都市研究における1924年『日本人調査』の位置」『東京経大会誌』190号, 1995年
- 3) 田村紀雄『カナダに漂着した日本人——リトルトウキョウ風説書——』2002年芙蓉書房出版)
- 4) 田村紀雄「知識とマス・コミュニケーション」鶴見俊輔他『二十世紀の思想』1967年 青木書店 105-136ページ
- 5) 仲村・小関・馬原他編『現代日本の社会問題』全4巻, 1966年, 汐文社, 仲村, 津金沢, 井上, 田村編『権田保之助著作集』全4巻, 1970年, 文和書房
- 6) 田村紀雄『日本のローカル新聞』1968年, 現代ジャーナリズム出版会
- 7) 思想の科学研究会編『共同研究 日本占領』1972年, 徳間書店, 思想の科学研究会編『共同研究 集団』1976年, 平凡社
- 8) 田村紀雄『日本のリトルマガジン』1992年, 出版ニュース社